

近世
霜夜星
帷談

13
3569
1

門 13
號 3569
卷 1



增師水外

戊辰初夏

此老 程氏 山

昭和三十四年六月三日
藏

藏書

羅氏

羅氏

余羅氏疾屏居讀書夜已初更門有剥啄聲家
僅起應之則友人種彥子也乃謂余曰吾為
一大事因緣來余驚而徐問其故種彥子曰霜
夜星一編既成剞劂告竣將以布世但所少者
足下序文而已盍以速成諸余因思數月前已
有其約以塵事紛々如猬集加旃衣食于奔走
未暇構思也就架上檢之種彥子所贈草稿在
焉取而朗誦一遍乃言曰天道恢々疎而不漏

增師水外

寺

積善有慶積惡有殃此古人真實語也夫伊兵
衛花兒相見于路傍也名士佳人才貌匹敵目
挑心許兩意已融液矣若是時而婚焉則琴瑟
好調鳳凰和鳴何不善之有唯其流離落魄伶
仃孤苦各各東西萍斷音絕一則踪跡不定索
囊空罄纔賴澤兒以餬口一則被棄棍徒落乎
花街終向快保帳下為羔酒兒可見二人之緣
於是乎休焉既而紙窗故紙認花兒筆移居芝
濱鑽穴竊玉百般不善自是北則安知不好因

緣卽惡因緣乎此舉也使伊兵衛棄糟糠之妻
花兒甲鼻負于恩人二人為人之輕佻可以知耳
媿婦冤魂為祟父子立地下世不亦宜乎求次
郎於津嶋則不然也少年情痴事遊冶桃花流
水各各有情更無驚蝶負心之行其殺于官太
夫則真真乙有數耳凡物過濃則歸淡過淡則為
濃此理之常無足怪者也花兒津嶋之為尼亦
復爾爾彼則思從前積惡漸來報愛着姦心
一時消盡矣擲玉簪而代念珠棄紅裙以着緇

衣積年之惡為讖悔滅矣此則情人死賊事起
非常頓思人世夢幻茫々無定遂奉佛行脚此
二凡所異也夫水滸小說中第一書也請舉一
二以論之打虎一也武行者以智黑旋風以力
殺婦人一也宋公明出於不得已武行者直情
銳往在於報仇耳此其所以稱妙筆也今種彥
子之作此編才子佳人其事稍同而其意則異
矣毋乃如顰水滸乎種彥子莞爾而笑曰然自
是燈下劇談不覺移時僮僕輩在傍者昏々然

睡種彥子曰今日之會談論如湧可謂愉快也
唯恨序文不成耳余曰此編機軸既妙矣何待
余文而輕重惟足下與余交情最密而更無一
言以弁卷端則後世其謂之何遂錄前言以為
之序

文化丁卯歲孟冬朔日

江戸柏菴玉丞撰



This image shows a fragment of an ancient manuscript, likely from the Voynich manuscript, featuring text written in a highly stylized, cursive script. The fragment is torn and irregularly shaped, with a dark, textured background visible around the edges. The text is written in black ink on a light-colored, aged paper. The script is dense and flowing, with many loops and flourishes. The fragment is positioned diagonally across the frame.

入
 柳
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

談 烟 世 歸

かみきり

りやよりあは

暴雨

光明寺

光

明

寺

うゑ
ふ
む
かんざ

うもづみち

あふのう

紅
系

むらさき
六浦

六浦

とぎむのねと

地ちのち

地

[illegible]

溺死

まなちや

星 生 夾 霜

ゆゑのさう

奇夏

是のむし乃秘

堤

三才

ᠪᠠᠭᠤᠨ ᠶᠢᠰᠦᠨ ᠵᠡᠳᠦ

乃古屋

古屋

つゝのいづ

怪吏

かきふま

空

۱۰۸

茶罍

三

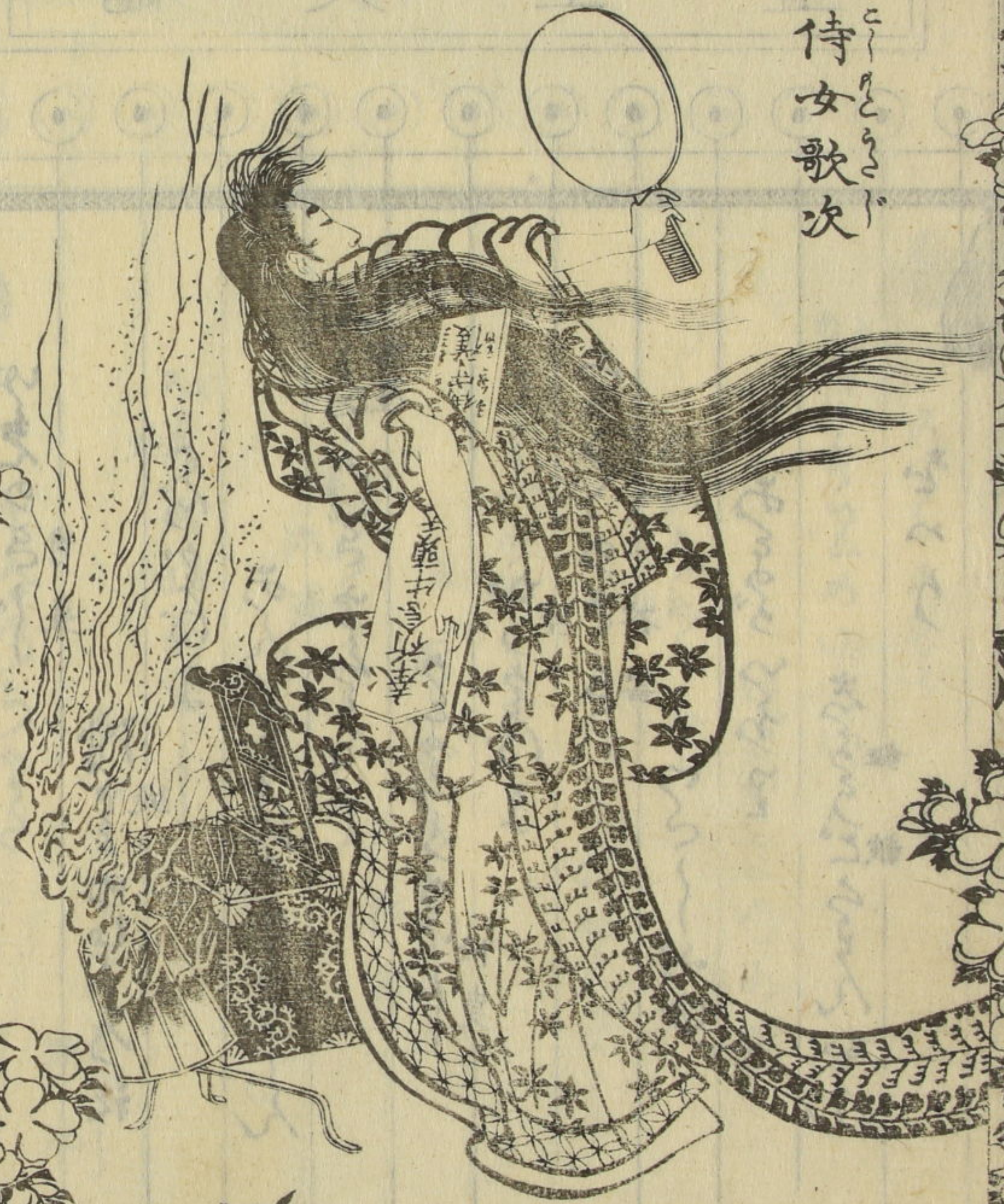
あまのうみ

あまごころん

鈕
鼓

をわう

侍女歌次



側女於花



高西伊呂波



於澤寛鬼



花方求次郎



卯月官太夫





修
行
者
圓
順



津
嶋
尼

三
木
石
屋
卷
二

花いり
やのふ
しきみ
ふれ
るの
うら
い

巴樓妓女津島墨跡

近世怪談霜夜星一卷

東都 種彦著

機語上 笠の由来
和田山乃

日ハ暮る雨ハつ野ハ神ねれてゐる旅路ふのむさうと法詠を
多々鉦をうたへてゐる。上總國笠森村觀世音菩薩へむじ當國橋井
といふ野ハ蜜をあげる農夫あり。それハ娘と波本といふ且ハと起
ぬるさ小月をいふ。ワウ遠く奈波の海へ出て。ウウちやのい。実
實く生親男ふつへ。一日といふ此山を過し觀音の立像あり。雨を
休ふとくをいふ。己がさる笠を御仏におさらせ。わい。五月雨
のとやうふ苗ひいて居る。不思議や光明赫々と。降下る雨乃ハ一滴



ふつふつわのひそ
めきききききき
あへへへへへへ
まのまのまのまの
まのまのまのまの

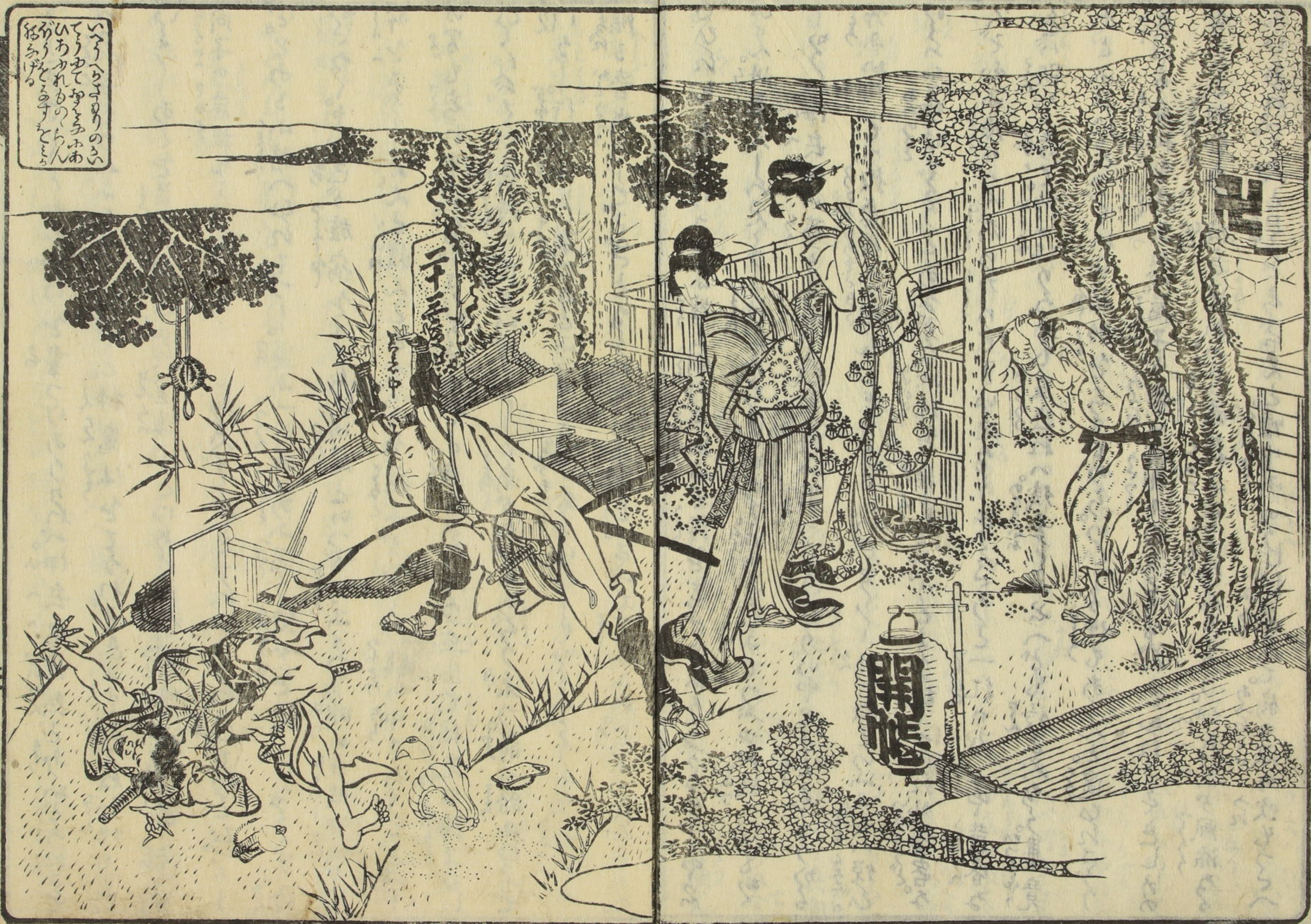


もかしらうしう。やへむるに御方此さよと見ゆ。ちて汲本をうけあ
とる。我のうとも家富さるう。笠森觀世音菩薩と名づけ奉る
る。てふて縁起と物語。今日雨帳のちやうとて。諸人蟻の蜜あつや
うかぢ。そも此御堂といひ四方塔づうの舞臺ふて。徳南の各うに精舎
ふ。蘭窓の彫る巧雲さう。楯柱ふさぎる王龍めぐる。上をまに金と飾め
さう。結構ついつてさへ。頃ハ三月中の八日。心念石空の風あさう。枯木乃
花ひ。利益ふうて。天の鳴雷といふのもか。それ実なる枇杷もさう。心
心信肝の銘ざるのとも。往來さぐくもさう。棒をつひひをねて
さう。を賣あう。或ハ刀玉や鐵銀くみと錢をさふもあう。此所小土人あ
やう。見物さへ一個の武士あう。彼ハ元房州海上山の山足芳見里といふ所の
産ふて。つかさねう。かづの。ある御館ふはし。てあう。往年芳見の里

ある。又丈治兵衛といふ者病ありと告せし。主人いよをねむ。仕を辞
して故郷ふう。実や病あせど。定まる令やあう。又丈治兵衛
さ人の數より。悲歎言ふ。演ぐる。むさく。忌もて。伊
ふふ。い。山家小住居して。樵夫漁翁ふもあひ。つづ。小月日を
人。人。者の本言ふあう。さう。他園ふう。家の往名をひね。と
連路ある。此觀音。彼年。二十ふた。口は鶏舌をう
。ふ。蘭とあう。と。鄙ふ。似え。風流士。日も。や。西ふ。つ。鳥
雀ね。を。頃。い。や。も。旅宿。う。と。夕陽。や。ゆ。扇。め
さ。ふ。つ。つ。ふ。を。え。れ。バ。二。人。づ。れ。る。女。里。人。と。え。え。び。づ。と。う。あ。う。
ふ。と。一。人。の。年。三。十。を。も。さ。へ。る。と。一。業。平。の。お。の。さ。や。あ。う。ね。ど。あ。わ。る。花
よ。う。い。の。う。て。い。と。う。い。今。一。人。の。年。二。八。を。う。る。さ。う。さ。う。秀。麗。ふ。て。自。い

暮ゆい春をむむ桃花のぞく。腰の百をらの糸をつねりゆもくへをし柳の
眉けうらるる髪のかう。ゆいひあつつに。冷ふうつそもも寫ゆ。華のくも
とむむびざうん。伊去清被うあひて斜ふさう。邂逅ふ人と生れり。力の
かゝる美人を書とまりてふと。世ふもむいもあつらふと。かゝるうらふのひは
人とさるふ。降ともあふね春雨のうらくと。良ふれね。うやねとてもなご口を
さ。花のめとある茶亭ふ想ひてそれれと。けと。彼女二人も同じ床机ふ腰
おけね。あれう。珍更とひねあを媒とあらう。伊去清茶など飲を
う。相管とささうのめとまじひ出る。女さうふ物やさん。無れなれ
ど。づれうづれへ。うさふと。若や恋のふづなもあらう。と。つと馴く
く。同じふれば。嫁とふがさう。あつて。それば。さあ。あつて。おの者ふて。けい
が。不幸ゆして。良人ふまれ。親をさう。と。叔父さう者。當國千種の浦ふさむ。は。

おれをさう。さう。ゆくと。さふも尋あむ。冷をべう。近なる草と。仁王と
て。往古孝女の心願ふて。一夜ふ三及の草をうら。ひと。さう。土人の口碑ふ
う。ゆふ都村ふ。さう。花子と。姉と。只二人。膝をつづね。さう。の庵ふ。世をあ
う。いふ。からう。けい。伊去清が。体面う。あらふ。のり。くや。さう。いふ。細く。とお
う。これ。伊去清も。あらう。づね。何と。やう。縁由。あらう。は。ね。ど。便る。れ。ひ。の。ゆ。さ
束。あ。が。む。さ。う。ん。て。ふ。花子と。や。ん。へ。端正。ふ。て。顔色。好。く。楊家。う。深窓。と。出
し。玉環。へ。さ。う。と。月。も。ね。さ。う。花。も。う。う。む。粧。ひ。さ。う。何。と。して。嘉。督。ふ。て。さ。う
さ。う。む。や。と。い。へ。花。子。も。顔。さ。と。あら。め。と。さ。う。う。両。親。ふ。さ。う。れ。て。さ。う。う。洋。子。舟。の
う。う。へ。か。う。ん。さ。う。も。さ。う。う。け。と。自然。と。眼。中。ふ。情。を。う。く。伊去清。を。え。れ。ば。
此。方。も。心。と。れ。め。り。ど。嫁。の。て。や。ん。さ。う。い。ひ。さ。う。言。さ。う。も。さ。う。と。や。や。さ。う。く。や。せ
や。と。さ。う。う。う。む。ふ。う。う。か。山。の。む。ん。男。洋。さ。う。と。あ。め。さ。う。来。り。か。て。頭。ふ。て。



いへりふりのうい
てうあてあふあ
ひあかれものいん
がうあてあふあ
あふあ

ふと。あまぐと公のしけを書つけあつたれば。伊兵衛愕然とおどろけ。そへ花子もわれふらうあやと。神龜体をてまね。よしふもあゝねむ地。いゝあをを鼻ひゆふ。かれ室嬢ふといひく声のゆゆふぞ。若や先の男。同子の悪棍をうらひ来んも知へうぞ。とやううやれ達てつとむつ。と。ある小路へひれまづ。遂に一斤の重み隔り。彼女をえらじうう。詮かづ。やうに旅宿をのめし。田尾といつて所ふへう。明の日被姉妹が宿所をさぐりえんと。寝んとするふ。花子があひけ腫の中ふあつて。さぐりのるもあれや。うづさむこりやと床のさぐり立出て。極先の障子にひく。や居待の月のいぼろくと南がわづあぐり来つ。前へ路ひびつて。行人征馬麿のめとみつると長令がいひもつるやうふや。谷川の漲る音あふして。さうとさうね座のやぐら。さへて耳ふふれ。目ふふ人からりの。

ふと涙をかくと媒といふうら。偶側をえれば。本氏の故の花押あり。伊兵衛へえ来花もふ道を好し。え。あふれ幾と。やう座ふをうら。花の下枝をわうらふ。石ふつづれ砂ふて足をしるべし。りんとするふ石盤ふ水。此旅店の前面ふ。漱々清水といふ池ありて。園夜ふ霜剣をねて。さへて。くええられ。さへて幸と先ふ。さうあ。漱々。清浄ふてあや。さう。南陽縣の菊水もふれ。いひ。さへて。又。漱々。あふ。不思義や。さうふ入て血鮮く。口中ふらう。ね。眉をいさめて。ふ。

立田川のさむさむ。神さひの三宮のひよ時雨ふら。じ。その古歌とあられど。此水上ふら。りて。とあふ。鉄をりて。門を造る悪鬼。ふをうつて。あれを笑ふ。い。う。る。珍。ま。る。人。う。畢。竟。さ。し。え。ん。ふ。へ。ま。う。と。独言して。水ふ。さ。い。半。町。さ。う。つ。し。ふ。枯。葉。は。ふ。ま。さ。い。や。う。く。と。踏。か。ひ。バ。

狐鬼のあとある怪あつた。流ふところの舟橋の縄をさうしておつた。うら
をらふ。和田山といふ一山の高山あり。春ふもあつた。ぬを地へて雲香のひのやう。
いふ泉天外より。ちね松奇栢枝とよ。へきびんがめと小月もめ。ぬい冷る
あつて夜襟の中より。若滑るる九ねと幸して筆登れば一字の辻堂とあ
がりのあり。青苔深をつて。様の夜半あきて半朽供物も筆のあひひやう
を。金糸と降雨ふらう。一曉のあ玉とつれて蓮坐のうそひひをそ人鹿や
ぶれて香石絶の香をふれ。船からて月常住の燈をわぐ。その物さうとい
ふ。さうし。あやしい。べー草堂のうら小女の叫ぶ声あり。さうとそと。わらう
て。さうふ一人の女ふ。丸をうり堂の柱ふ。い。あ。わ。れ。今一人へ大男上へまが
る。黒髪をたのふ。ふ。ま。い。右のめふて柄もさう。い。と。わ。情。を。さ。う。つ。ね。え
る。として。此鮮血谷川へま。れ。ん。ま。ん。山賊の。と。と。と。腰。刀。わ。く。も。も。え。せ。い



いひやうへへ。びや。に
し。つ。を。さ。う。ち。の。わ。の。さ
が。れ。ん。を。さ。う。ち。の。わ。の。さ
や。う。ち。の。わ。の。さ
あ。ま。ひ。し。く
う。う。あ。その。うち

その二





いひつゝへりまびと
さそくひんごやま
ふもんせつまつ
つりづををらりて
かほあがらる



あつらん此多勢ふても取
ふがとこのあじと。かやうこ
てどうと倒れ人ごらへあう
アタリ

機語下

光明寺

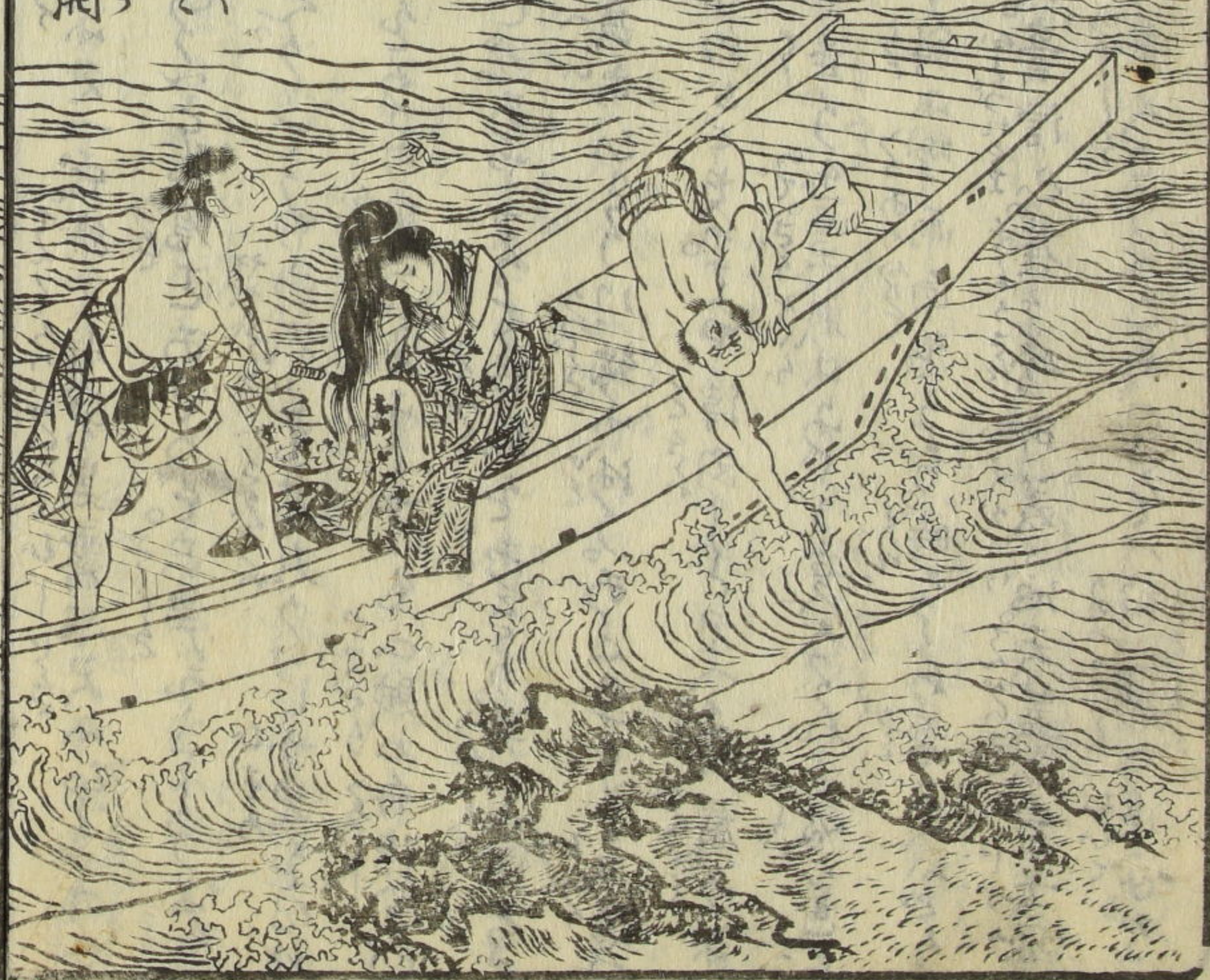
形見の并

伊兵衛へ和田山は岡谷はし。

さうみ正と来さうし。いづこた

る雲板のこゑ。幽ふ少(霞)て

る香烟。鬼申しうて。目を開



け。幢幡風は内に須弥壇の上

み蓮花部の印をむとびむい。

阿弥陀如来おほして。蓋蓋邊

豆の器。燈明の火ぐらうつ。

とふむれさうむとせ。板のふく

も商浮堤をさるれ極楽より

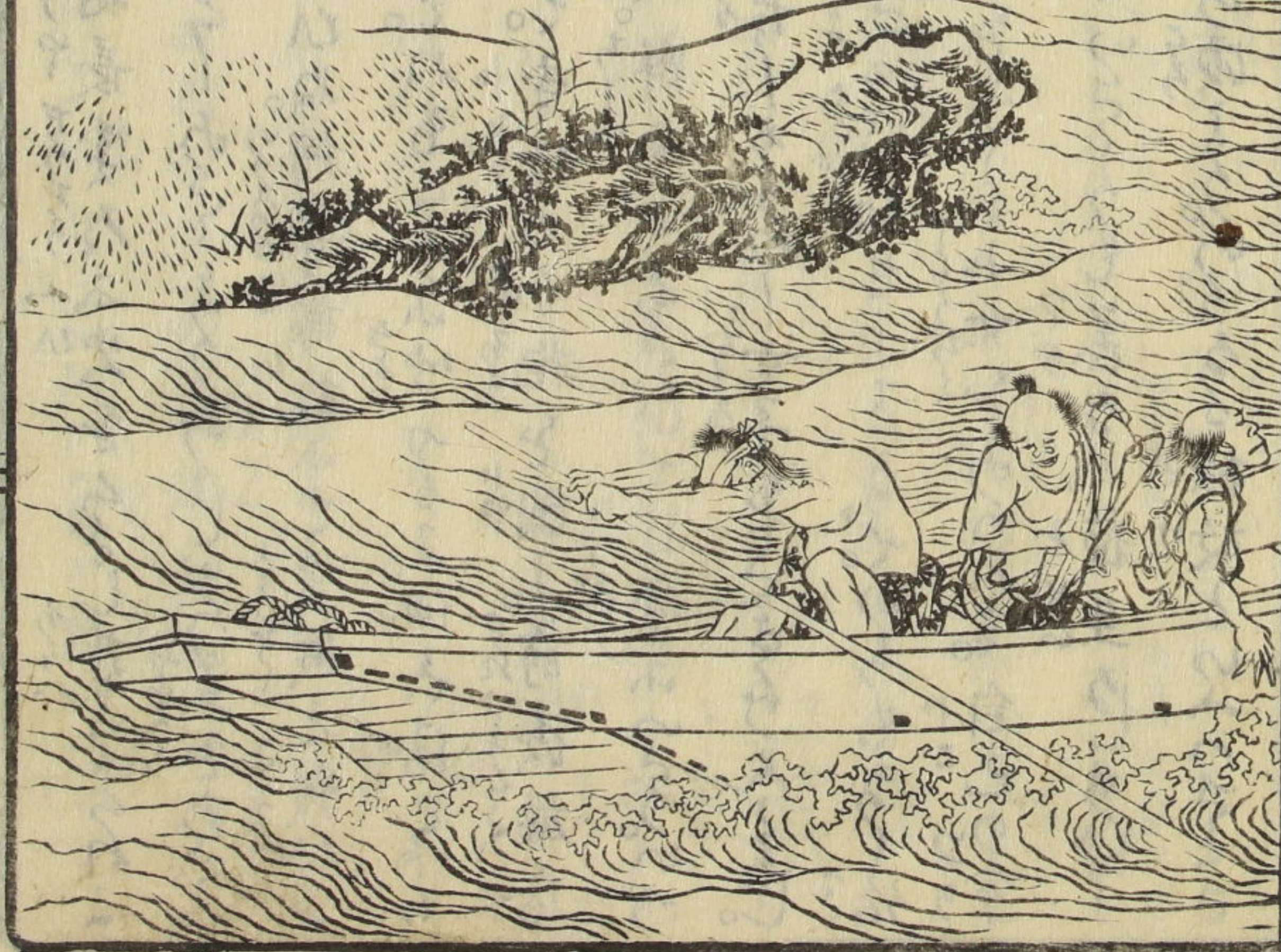
さしうと。いづろつ四方をふれば。

一人の長を伊兵衛が側よりうぐ

とあやさう。旅人かをまつめ人。

此所へ前夜に賊と戦ひし和

田山の麓。光明寺といふ蘭若あり。



これと此和田山は乱やれの又羊頭の矢の根此二品をいづる者
みづうふ登ることをゆるさそ若押てふ登るせば大兩ぐう武の天靴大
地ふあちてお殺さうくもあう。又ハ日づうの本の枝頭上ふあち丸を
めつて斬ぐぐ。兩段ふあうて命をかこせーものもあうとやん
旅客幸ふして又ふ恙なしとさうね。果して伊去留が刀の関う
らの無銘ふして。乱やさううられバ。爰ふあいてふあれー。極故を
あう。彼刀側はあうううとさうあぐえれば。さう紫銅の膽瓶
ふて戦ーゆゑやん又恋くとべれ。鏝のぐくふううう。扱わく
のふれ佩刀ふてさううさびーやん。甲斐ふれともさう。盜賊一人
ふもあうとあざうじと漸様されふあやういぞん顔とあふ浄水を
流る。石盤の水香んと水面ふうつる。顔あえれば色ハ瓢の枯ぐうぐ

ど。唇へのみちの涙を食ふ小唄。かゝ知へとも伊去清をつ
れありし邑老より。のきこの土人かれ旅人小の養生ふやと。
蓮あるさんごといふのときけふふめらつ来るあれば。さんご土つ
ひらう捨く来るもめら。又ハ祭るるごとく。かひらふふの夜もかま
つど。人かゝりて来るもめら。傍らうゆれそれくの夜やれの五夜破
蚯蚓ちうの二帯へ。わうめのごんぢうるるごとく。立ちあぐとらへ。
中ふもふとや。やあるる。旅人そや。薬師ふてもゆいふ人をねえ
てめひもへととゆね。側らう旅人とも賊の同類ある人といひ
しとも。ためあやで。へつと戦ふ方あるふ。もどめられ
旅人ふも縄うけんとし。さうなど。同話。口くふくわくうら。伊去清
ハ漸水香。かからつたふとめいいで。さうふても彼女いづくの者

やうんと。四十さうりの男ふ問われ。かたと答てゆい。夜前殺れ。い
ゆふて。本凡うけ山賊のいさうひり。於花といふ妹うつと夢さう伊
ふ。清ふとびおぢうれ山賊とゆい。めめ昨日笠森觀音ふて我
ハ芒鞋をめてあうりし男。うん又忙しく花子と連て立退。ハ
まつ。の回体の男ふて。いさやといへ。さねばとよその男ハ雲舞
の半六として悪棍なる。あて花子とめいひ。さう妻ふるうんと。あ
ふて。いさる花街ふも。うりりし。金をめて。高妓ふるうんと。あ
ふや。あふさう。うらと。あてめやん。むらじく切殺。今朝め
てえれば。片腕お落され。地藏堂の縁の上ふめり。さうのふや
刀ふても。あふしやん。五本の指とぐく。あうさうし。さう。物持ふ。又
側らう。さも里の子とあが。十五さう。小女うふ。於花女郎ハ

花子いふる村里みさあひ。土岐傀儡とあつと旅客小錦帯をぬ
るをもとも。ふぶ侍うげあふ。再びさう出さんめのと。五三日の
郊ふとさう。さあをふし常のむらひひれううて。よづ長老小別を
つげ。奴のき骸とあつと葬う。香花のふを頂ふとめ。ぬ寺傍に
それくふ布施をあらう。やうて出やうんと酒肉をさう。ひる石碑ふう
きひ。さうんだの奴おあめつ。栴門の額うらえれの音信山とさ
う。風流の道もかとうたれば夫木集ふ
あふさうねまつれば。よとと音づれふのふひあう
夫と事ふれど花子と尋人小音信山のかとづれを。歩いてや
人とふふ誓ひ旅宿ふう。骨柳脚半など。こさぐと行装と
と。ふさづう小縮毛の神と伏あふ。それうして杖のうのあ

ぞらせらるゝと誦一。千種ちくさの浦うらをあらふふええはしし舟ふねめめふふふふれれど。
 風かぜああううししと。水主みづぬし楫取こしえ重石じゆうしやくとひひれれめめげげ。催馬さいばああううねね掉ふたううふふ。
 旅たびのううささととここととれれ。蕭颯せうさつとと風かぜふふううせせ。小網町こあみまちといいふふ舟ふねふふるるけけるる。
 此下伊去このした清武しやうぶ菰こもの園のゐんふふりりひひれれ。於澤おのさわといいふふ媿婦かいふのめめとと接脚けつかく磐い。
 ととうう。ややととびびおおれれふふりりづづううめめひひ。おお沢さわとと偽いつはりううてて去さししととううどど。十じゅう余よ。
 年としのううちち種くさくててのめめののぐぐううめめうう。ううちちづづーーたたれればば詳つづふふとと説とくとと。
 下回したわいはは花方はなかたボボ次郎じらうといいふふ處士ちうしのめめののぐぐううををめめとと。推量おしりやう知しぶぶ。
 ううとといい一いち巻まきとと機語きこととななしし二に巻まきををううてて一いち回かいとといいふふ巻まきををううててばば。
 二に巻まきををううててばば。別べつふふああううししれれ物もの館かんとといいふふるるばば首尾しゆび詳しやうふふ知しるるべべいい。

霜夜星一卷畢

